

## Boothの人格と“Fortune”

雲 島 悦 郎

*Amelia* (1751)<sup>1)</sup>の出版当時から今日まで、主人公 Booth 夫妻に対する人物評価はあまり芳しいものではない。特に夫 Booth は、彼が犯した姦淫等の罪ゆえに、hero の名に値しない下らぬ男と見られがちである。

一般に、読者が各自の価値基準から、作中人物の人となりをいかように評価しようと、それは一向に構わないし、それなりに意味のあることだ。Fielding 自身も、Richardson の *Pamela* (1740) の主人公 Pamela を、作者の思惑通りの貞淑な女性とは見なかったし、彼女がそのような人物として一般に受け入れられることに危険性を感じたから、*Shamela* (1741)、更には *Joseph Andrews* (1742) を書いたとも言える。このように、ある作品を、作者の意図を越えた所で理解するのは、無論誤読でも何でもなく、至極正当な読み方である。

*Amelia* について言えば、男女平等思想の普及した今日では、Booth はもとより、彼に唯々諾々として従っている *Amelia* も、読者の同情、共感をひくだけの魅力は持たないかもしれないし、それはそれで仕方がない。しかし、読者がそういう印象を受けるからといって、作者がそのような人物として描いたとは必ずしも言えない。Booth は確かに弱点を備えた人物として描かれているが、どうも次第にその弱点の方が大きく見られ、作者

---

1) *Amelia*, それに *Joseph Andrews* と *Tom Jones* からの引用は Wesleyan edition により、それ以外の作品の場合は、特に断らない限り Henley edition による。

が意図しなかった弱点まで、あたかも作者が意図したかのように背負わされる向きがあるのではなからうか。もしそうだとすれば、これは明らかに問題である。

作品の冒頭の部分で、語り手は Booth 夫妻のことを “very worthy Couple” と呼ぶ。夫 Booth の幾つかの失敗を思うと、“very” は多少 ironical に響かないこともないが、しかし女性の鑑の如き Amelia に、彼の欠点を補って余りあるものがあるとすれば、この表現も左程不自然ではないという言い方もできよう。しかし、それだけでは不十分で、Booth 自身が少なくとも “worthy” だと作者が考えていないことには、作品が重要な点において成り立たなくなる。というのも、この作品では “Merit” の問題が大きく取りあげられており、そういう観点からすると、一つには、Booth がやはり Amelia を妻に持つに値する男でなければならないからである。それに又、この夫妻が現世で共に幸せに暮らして行くに値するからこそ、最後には Amelia の手に、横領されていた遺産が戻り、物語が目出たし目出たしで終るのである。このように幸福な結末をつけるには、それなりの理由がなければ、たとえ喜劇的な作品と言えども、詩的正義にもとり、説得力を欠くことになるろう。<sup>1)</sup> そうならないためには、Booth 夫妻が種々の苦難にもめげず、それを乗り越えようと努力した事実が認められなければならない。そして、語り手は、その結果的事実をにらんで、Booth 達に “very worthy Couple” という評価を下しているとも考えられる。そして、妻 Amelia の方は「女ヨブ」とも呼ぶべきで、良く信じ良く耐えたからともかくも、夫 Booth の方もよく苦難と闘った立派な男だと読者に認められ

---

1) Andrew Wright は、Amelia がもはや “comic epic poem in prose” ではないから、あのような happy ending は納得がいかないと言う。See Andrew Wright, *Henry Fielding: Mask and Feast* (Chatto & Windus, 1968), pp.120-21. このように、作品の結末のつけ方が安易に過ぎるとする点では、Robert Alter の見解も同じである。See Robert Alter, *Fielding and Nature of the Novel* (Harvard U. P., 1968), p. 165.

ることを作者は期待していたに違いない。<sup>1)</sup>

Booth と Amelia の結婚が, Amelia の母親の反対で難航していた時, 二人に力を貸したのは牧師の Dr. Harrison であるが, Booth によると, Dr. Harrison は Booth の人物調査を行った結果, 次のような判断を下したという。

‘... the Doctor was so kind to say, he had enquired into my Character, and had found that I had been a dutiful Son, and an affectionate Brother. Relations, said he, in which, whoever discharges his Duty well, gives us a well-grounded Hope, he will behave as properly in all the rest...’ (II, vii)

この内容は, M. C. Battestin も指摘するように,<sup>2)</sup> 作者の考えでは, Booth が善良で申し分のない人間の証左である。そして, Dr. Harrison のこの結論は, 例えば彼の不十分な調査のせいであてにならないとか, 又は Booth がここで嘘をついているかもしれないというような読み方は, Fielding の作品にはなじまない。この場合, 間違いなく, Booth は結婚するまでは, Dr. Harrison の調査通りの申し分のない人物だったのである。そして結婚した後も, 彼がそれによって墮落をしたと推測すべき理由は何もなく, 次の Amelia の言葉に見られるように, 彼女には十分満足できる夫だった。

‘... if I had all the Merit you compliment me with, I should think it all fully rewarded with such a Man as I thank Heaven

---

1) George Sherburn も本論と同様に, まず作者の意図に沿って作品を理解しようとする (“Fielding’s *Amelia*: An Interpretation,” *ELH*, III [1936], 1-14)。しかし, そうでありながら, 彼は Booth には, その感情論ゆえに, 不運と闘う “moral courage” が欠けていると言う (*ibid.*, p. 4, n. 4)。Sheridan Baker などは, 実際に作品が作者の意図通りに描かれていない点を強調する (“Fielding’s *Amelia* and the Materials of Romance,” *PQ*, XLI [1962], 448-9)。

2) *Amelia*, ed. Battestin, p. 90, n. 1.

hath fallen to my Lot; nor would I, upon my Soul, exchange that Lot with any Queen in the Universe.’ (VI, iii)

しかし、彼に対する評価を大きく揺がすのが、例の Miss Mathews (Matthewsとなっている版もある) との浮気の一件である。この一件について、語り手は次のような弁護を試みている。

We desire therefore the good-natured and candid Reader will be pleased to weigh attentively the several unlucky Circumstances which concurred so critically, that Fortune seemed to have used her utmost Endeavours to ensnare poor *Booth's* Constancy. Let the Reader set before his Eyes a fine young Woman, in a manner a first Love, conferring Obligations, and using every Art to soften, to allure, to win, and to enflame; let him consider the Time and Place; let him remember that Mr. *Booth* was a young Fellow, in the highest Vigour of Life; and lastly, let him add one single Circumstance, that the Parties were alone together; and then if he will not acquit the Defendant, he must be convicted; for I have nothing more to say in his Defence. (IV, i)

ここで語り手は、Boothの落ち度は一切考えず、ただひたすらBoothの弁護を試みていると取るのは皮相な見方に過ぎる。しかし、また反対に徹底した irony だけを認めるのも一面的であると思われる。<sup>1)</sup> この弁護が irony に感じられるのは、あげられた理由が、どれ一つとして浮気を止むなしとするものではないからだ。しかし、語り手の弁護は単なるジェスチャーか

1) Cf. Eustace Palmer, “*Amelia* — Decline of Fielding’s Art,” *EC*, XXI (1971), 141ff. 語り手のこの弁護に関し、拙論「*Amelia*における公私さまざまな問題について」『下関市立大学論集』第28巻第1号 45—68頁では、人の行為の評価において、行為の状況、その意図、そして行為者の全人格が考慮されなければならないと作者が考えていることを論じた。

と言うと、そうでもない。大体、浮気を正当化する理由がそうある訳はない。だから、むしろ大切なのは、Boothが弁護に値する人物だから、語り手が少しでも弁護してやろうとしている事実だと言える。

性の問題に関して言えば、作者は大体若気の過ちには寛大であったように見える。*Amelia*でも語り手は次のような言葉をもらす。

... I myself (remember, Critic, it was in my Youth) had a few Mornings before seen that very identical Picture of all those ingaging Qualities in Bed with a Rake at a Bagnio... (I, vi)

語り手は、かつて若気のいたりで、女郎屋に足を運んだことがあることをにおわせているが、作者Fieldingは往々にして語り手と同一視され、語り手のこの種の発言のために、作者自身も若かりし頃は相当の遊蕩児だったと見られがちであった。*Tom Jones* (1749)のTomも一度ならずこのような過ちを犯すが、結局は許された形になる。また*A Journey from This World to the Next* (1743)の語り手で、前半は主人公の「私」も同じで、彼は死後魂の旅を続け、極楽(Elysium)の入口にたどり着いた時、そこでMinosの厳しい審問の様子を目の前にして、自分はとうてい許されそうにないと観念するが、それでも結局許される。彼の順が回って来た時の模様は次のように述べられている。

The judge then addressed himself to me, who little expected to pass this fiery trial. I confessed I had indulged myself very freely with wine and women in my youth, but had never done an injury to any man living, nor avoided an opportunity of doing good, that I pretended to very little virtue more than general philanthropy and private friendship. — I was proceeding when Minos bid me enter the gate, and not indulge myself with trumpeting forth my virtues. (*Works*, ed. Henley, II, 245)

こうして彼はいかにも楽々とこの難関を突破することになるが、ここで大切なのは、彼の若かりし頃の放蕩が、ただ若気の過ちとして無条件に見逃されたのではなく、彼の善行ゆえに大目に見られたことである。

人間性は本来悪ではなく、悪しき習慣、教育等によって歪められているとしても、人間社会は悪意に満ち満ち、種々の計りごとがめぐらされ、落とし穴が掘られている。<sup>1)</sup>しかし、そんな中でも、善良な人間は、多少の過ちは犯そうとも、悪意をもって意図的に他者に危害を加えることはない。それどころか、人の難儀を見れば、積極的に援助の手を差し延べる。この善行こそが徳行の最たるもので、これを行う者は多少の愚行はあろうとも、救済に値すると作者は考えている。そして、Tom が許され、また Booth が許されるのも、結局同じ理由によるのである。

Booth は一部過った行動をし、過った考えを持ちながらも、本質的には徳を重んじ、それを行動に表わし、外的情況に大きく流されることもなく、前向きに生きようとしていると見られるが、そう判断する上で、Booth が “Fortune” を果してどう捉えているかは、極めて重大な問題になる。

“Fortune” にかかわる重要な表現は、第一巻第一章と同巻第三章に集中している。そこで、本論ではこの両章を重点的に取りあげることになる。

先ず第一章であるが、ここでは、作品と主人公の特徴が前置きとして述べられている。この中で一般論の形で述べられる種々の事柄のうち、どの部分が Booth 夫妻（特に夫 Booth）にあてはまり、どの部分があてはまらないかの判断が、作品の解釈上極めて重要である。

第一に注目すべきは次の箇所である。

I question much, whether we may not by natural Means account

---

1) Dr. Harrison の意見から。 “. . . The Nature of Man is far from being in itself Evil: . . . Bad Education, bad Habits, and bad Customs, debauch our Nature, and drive it Headlong as it were into Vice. . . .” (IX, v); “. . . the malicious Disposition of Mankind is too well known. . . bad as the World is, it seldom fall. . . .” (III, i).

for the Success of Knaves, the Calamities of Fools, with all the Miseries in which Men of Sense sometimes involves by quitting the Directions of Prudence, and following the blind Guidance of a predominant Passion . . . (I, i)

Boothは作者によって、決して“Knives”や“Fools”の一人として描かれてはいない。彼は、他者と自己の行動の分析と、それに学問的な裏付けにより、“... every Man act[s] merely from the Force of that Passion which [is] uppermost in his Mind, and [can] do no otherwise.” (I, iii) という誤った説を奉ずるけれども、全体的に見ると良識をそなえた人間、即ち“Men of Sense”の一人である。ならば、彼の不幸とは、時々良識ある人々が分別の指示に従わず、最も優勢な感情の盲目的指示に従ったために陥るようなものであることになる。とすると、当然次の部分もBoothのような人間のことを言っているはずである。

To retrieve the ill Consequences of a foolish Conduct, and by struggling manfully with Distress to subdue it, is one of the noblest Efforts of Wisdom and Virtue. (I, i)

Boothは、このように、失敗にもめげず、苦難に雄々しく立ち向って行く人間と考えられていることになる。もしそうならば、彼が果して、この章にあるような、“Fortune”の支配を信じ、“Fortune”が実際はかかわりもしない事実を、“Fortune”のせいにするような人間のうちに入るかどうかである。そして、今まで述べて来た事から常識的に判断しても、彼がそのような外的なものに責任転嫁をするような人間だとは一概に言えないはずである。そのような人間には、失敗を挽回しようという意欲など起こるはずもないからである。しかし、それだけでは理由としては不十分であろう。ではそもそも、“Fortune”とはどのようなものと考えられているだろうか。次の箇所を見ることにしよう。

The Distresses which they waded through, were some of them

so exquisite, and the Incidents which produced these so extraordinary, that they seemd to require not only the utmost Malice, but the utmost Invention which Superstition hath ever attributed to Fortune . . . (I, i)

“Fortune” は迷信により、無論人に味方をする場合もあるが、ここでは苦難との関連で、この上ない悪意を抱き、悪さをしかけるものと考えられ、そうした “imaginary Being” (I, i) としての特性が大きく浮かびあがる。

大体、Fielding の作品では、迷信的な人物は脇役である。Adams は例外とも言えるが、しかし彼も脇役と言えは脇役である。名目上の主役である Joseph や Tom にはそういう所はない。Booth も又、知性的な人物として描かれており、迷信的な人物とはとうてい考えられない。その彼は、Miss Mathews に、彼女に会うまでに自分達の身に起こった事どもを説明している時、次のような言葉を吐く。

‘I am going now, Madam, to relate to you one of those strange Accidents, which are produced by such a Train of Circumstances, that mere Chance hath been thought incapable of bringing them together; and which have therefore given Birth, in superstitious Minds, to Fortune, and to several other imaginary Beings.’ (II, vii)

明らかに、ここで Booth は “Fortune” を迷信のうんだ想像上の存在として、その他の想像上の存在と同列に見ている。ということは、当然彼はそのような “Fortune” の支配など信ずるつもりはないということになる。<sup>1)</sup> だが

1) Booth は別の所では次のように言う。

‘. . . I have tasted of some Distresses of life, and I know not to what greater I may be driven; but my Honour, I thank Heaven, is in my Power, and I can boldly say to Fortune, she shall not rob me of it.’ (V, ix)

これを読むと、Booth は “Fortune” の存在を信じているようにもとれる。しかし、*Amelia* では、“Fortune” の支配など信じないような人も平気で “Fortune” を口にするから、その点を考慮すると、この Booth の言葉はあくまでも比喩的表現であって、これにより彼は外的情況のままにはならないという堅い決意を表明していると解釈すべきである。



ら少なくとも迷信的な想像上の存在としての“Fortune”を否定的に見ているという点では、語り手とBoothは変わらないはずである。

ところが、D. S. Thomasは、第一巻第一章で語り手は“Fortune”を否定するけれども、同巻第三章でBoothは“Fortune”の支配を信ずる人間として、語り手に対置されていると主張する。<sup>1)</sup>そして、Boothが“Fortune”の力を信じているとする点では多くの学者の意見が一致している。<sup>2)</sup>しかし、上に見たように、“Fortune”の中味を問わずに、Boothが“Fortune”の支配を信じていると言い切るのは、やはり問題がある。そこで、本論ではBoothの意識も取りこんで、別の形に“Fortune”の問題を整理することにする。

先程の言葉の中で、Boothは迷信的な“Fortune”と“mere Chance”とを区別しているが、“Fortune”の問題を論ずるには、この区別を一応念頭におく必要がある。<sup>3)</sup>

第一章にもどる。語り手は“great Incidents”について、それは“mere Accidents”ではないと言うが、言い換えれば、それらは“mere Chance”によって引き起こされるのではないということである。では、ほかの所でAmeliaが言うように、<sup>4)</sup> “Accidents”は全て神の意志によると語り手がこ

- 1) D. S. Thomas, “Fortune and the Passions in Fielding’s *Amelia*,” *MLR*, LX (1965), 176. 但し Thomas は, “At the *metaphysical level*, Booth accepts the hypothesis of a universe ruled by Fortune. . .” (*op. cit.*, p. 176; italics mine) とも言っているから、迷信的な“Fortune”は除外しているのかもしれないが、明確ではない。同論文は参考文献としてよくあげられ、Battestin によっても高く評価されている。See M. C. Battestin, *The Providence of Wit: Aspects of Form in Augustan Literature and the Arts* (Clarendon Press, 1974), p. 299, n. 52; “The Problem of *Amelia*,” *ELH*, XLI (1974), 617, n. 10.
- 2) E. g., J. S. Coolidge, “Fielding and ‘Conservation of Character,’” *Fielding*, ed. Ronald Paulson (Prentice-Hall, 1962), p. 164; Palmer, *op. cit.*, p. 135; R. L. Oakman, “The Character of the Hero: A Key to Fielding’s *Amelia*,” *SEL*, XVI (1976), 481.
- 3) D. S. Thomas も “Fortune” がこの二つの意味で用いられていると指摘はするが (*op. cit.*, p. 176), 実際の論の展開では全然問題にしない。
- 4) “. . . against that Divine Will and Pleasure, without whose Permission at least, no Human Accident can happen. . .” (VIII, iv).

こで言わんとしているかという点、この段階ではそうでもない。語り手は無論“Providence”の存在を信じているけれど、見落としてならないのは、語り手はこの章で“Providence”又はそれに相当するものには一切ふれず、諸々の出来事には簡単に気付かないような微小な原因があると言って、それらを“natural Means”によって説明しようとするのである。これはFieldingの“Christian Philosophy”の論理の一つの特徴であり、物事を先ず“Philosophy”で論じ、その後でキリスト教の観点を加味していくという具合に、二段構えで論じていくのである。<sup>1)</sup>そして、語り手はここで、人生の諸々の重大な出来事は、迷信的な運命によるものでもなければ、単なる偶然によるものでもなく、自然の因果関係によって起こると言うのである。Boothが迷信的な“Fortune”を信じないのも、彼が“natural Means”で物事を考えようとするからだと思われるが、しかしそのかわりに、第三章で見るように、キリスト教の超越者“God”の“Providence”があるとも、なかなか信じられない。彼は第一段階ではまずまずの評価が与えられるが、それを越えて第二段階で安定するまでに至っていない。

他にこの章で重要な事としては、“Prudence”と“Passion”の関係がある。“Reason”が“Passion”を制御できるかどうかということは、Fieldingの作品でよく問題になるが、ここでは“Prudence”が“Passion”に対置されている。“Prudence”は“Reason”につながるものだから、*Amelia*においては、感情を制御する面が“Prudence”の役割として大きく取りあげられていることになる。<sup>2)</sup>そして、Boothの最大の欠点は、感情の制御を考慮どころか、その絶対的な支配を信じていることで、“Fortune”の問題は実はこの“Passion”の問題と密接に絡んでいるのである。

今度は、キリスト教の視点が加味された第三章を詳しく見ることにする。

- 
- 1) このことについては、拙論「Boothの‘philosophy’と‘Christian philosophy’」『下関市立大学論集』第27巻第3号 1-28頁で詳しく論じた。
  - 2) “Passion”を制御する“prudence”の面については、Battestin, *The Providence of Wit*, pp. 164-92を参照のこと。

Booth は牢の中で Robinson という賭博師と出会う。そして、この二人の間で対話が行われることになる。Robinson は一端の賢者気取りでその哲学を開陳するが、それは“Fate”というものの存在を信じ、全ての出来事は宿命によって起こるが故に、人間が何をなそうとも無駄だとするものである。第一章にいう所の“Art”を否定し、人生の困難に対しては無関心と平静で臨むことの必要性を説く。そして語り手は、Robinson が述べたことは偶然ほとんど Booth の考えと一致したと言う。しかし、ここで注意しなければならないのは、完全に一致した訳ではないことで、その違いもまた重要視されているのだ。

Robinson は“Freethinker”，即ち理神論者か、もしかすると無神論者であり、宇宙の創造者（第一原因）としての神的存在は完全に否定はしないものの、宇宙内の出来事を左右する力（第二原因）としての“Providence”は全く否定する。それに対し、Booth は、宗教に対しては非常に好意的であり、ただ彼の宗教についての概念が薄っぺらで、不確かなだけであり、丁度 Claudian によって描写される不安定な状態（“wavering Condition”）にあるという。そしてこの後に Claudian からの一節が引用される。

ところで、一般に Fielding の作品における他の作品からの引用は、作品の本筋の内容と全面的に重なるとは限らない。引用は、あくまでも補助的であり、半ば作品の外にあるものだから、その程度のもので理解すべきである。たとえ無視しても、作品の理解にはそう差し支えない程のものである。

Claudian からの引用の場合でも、Booth と Claudian の共通性は、引用文の前後の本文の内容で十分わかるし、そこに読み取れることが一番肝心な内容であって、反対に本文にないものは余分な情報だとも言える。そこで、この際ひとまず引用の部分を度外視して解釈を続ける。

引用文のすぐ後の本文は次のようになっている。

This Way of thinking, or rather of doubting, he had contract-

ed from the same Reasons which *Claudian* assigns, and which had induced *Brutus* in his latter Days, to doubt the Existence of that Virtue which he had all his Life cultivated. In short, poor *Booth* imagined, that a larger Share of Misfortunes had fallen to his Lot than he had merited; and this led him, who (tho' a good classical Scholar) was not deeply learned in religious Matters, into a disadvantageous Opinion of Providence. (I, iii)

(作者の言葉にもあるように) 要するに, “Providence” の存在が信じられない Booth の懐疑的姿勢がここでは強調されている。そして, その理由は, *Claudian* が “Providence” の存在を, そして *Brutus* が徳の存在を信じられないのと同じである。しかし, Booth が “Providence” の存在を信じられないから, 反対に “Fortune” を信ずる気になったというようなことは本文では一言も述べられていない。また, “Providence” の存在を信じないことは, “Fortune” の支配を認めることにつながるとしても, ここで直ちにそう決めつけてはならない。それでは Booth の揺れの特異性を見逃すおそれがあるからである。

他にこの引用文では, 彼が宗教には明るくないけれど, 立派な古典学者であることがわかる。この事実はやはり重要であって, 再度別の所でも指摘される。<sup>1)</sup> これは別の言い方をすれば, 前にも述べたように, 彼が哲学の段階では相当のものであることを示していると考えられる。そして, その程度と, 彼の “Fortune” に対する姿勢には深いかかわりがある。

ここで *Claudian* からの引用にもどる。この一節は Loeb 版の英訳では次の通りである。

... then in turn my belief in God was weakened and failed,

1) “*Booth*, as the Reader may be pleased to remember, was a pretty good Master of the Classics. . . *Booth* was therefore what might well be called in this Age at least, a Man of Learning. . .” (VIII, v).

and even against mine own will I embraced the tenets of that other philosophy which teaches that atoms drift in purposeless motion and that new forms throughout the vast void are *shaped by chance and not design* — that philosophy which believes in God in an ambiguous sense, or holds that there be no gods, or that they are careless of our doing. (italics mine)

この斜体の部分が、原文では“*Fortuna non arte regi*”となっており、D. S. Thomas はここに注目して、Booth が結局 Claudian 同様、“*Fortuna*”即ち“*Fortune*”の力を信じていると解釈する。しかし、そのような重要な情報が、ラテン語の引用文の中にしか読み取れないのは実に妙である。作者がそれ程までに一般読者を無視しているとは考えられない。<sup>1)</sup> だから、要するに、Claudian との比較で作者が言わんとしたのは、Booth が“*Providence*”に関し、Claudian 同様の理由で、Claudian 同様に揺らいでいるということで、揺れてどちらの方向に傾いているかは、ここでははっきりさせず、その後の Robinson との対比の中で具体的に明らかにされていると取るべきである。

Booth と Robinson は、Booth 自身の理解では、“*Necessity*”，それも“*Necessity of human Actions*”を信ずる点で一致している。しかし、Booth は、Robinson のように、人間は“*Fate*”の盲目的な“*Impulse*”又は“*Direction*”の下にあるとは考えず、人間は己の心中で最も勝った感情に従って行動するだけだと思っている。彼は“*Necessity*”という語は使っても、Robinson の使う“*Fatality*”は使わない。そして、“*Fate*”の“*Impulse*”に起因する必然性と、“*Passion*”の“*Impulse*”に起因する必然性をめぐって、二人の間に議論が行われたという。そして、語り手は、この内容は、

1) 本論とは反対に、Sherburn は、Claudian の一節が翻訳できないと、作品の十分な理解はできないが、当時の大部分の読者はラテン語がわからなかっただろうと言う (*op. cit.*, p. 2)。

相当分厚いパンフレットになる程だから、別の機会にとっておくと言って、それ以上ふれない。ふれなかったのは、読者が作品全体から十分推測することができるからである。そして、本論で“Fortune”に関して論ずることは、まさにそれを推し測ったものであるとも言えよう。

一般的に言えば、“Fate”とは、予定された運命というニュアンスが強く、“Fortune”とはかなり違う感じがする。しかし、*Amelia*においては、両者ともに神格化され、悪意という共通の特性を持たされており、ある意味で、“Fate”は“Fortune”の仕業の結果とも、“Fortune”は“Fate”の執行者とも言える面があるので、深いかかわりがある。<sup>1)</sup>ところで、Battestinの注釈によると、Claudianの意識する“*Fortuna*”の支配を信ずる“that other philosophy”とは、Epicureanismであり、そして古代のEpicurusの近代における後継者はHobbes等であり、その末裔としてFieldingが特に意識していたと思われる当代の思想家はfreethinkerのAnthony Collinsである。そして、作者は作中の自由思想家Robinsonを特定の哲学者と結びつけたくはなかったかもしれないが、それでもこのCollinsとのつながりは強いともいう。<sup>2)</sup> そうだとすれば、Robinsonのいう“Fate”とはやはり“*Fortuna*”即ち“Fortune”のことであり、Robinsonこそ*Amelia*における典型的な“Fortune”の信奉者だということになる。そして、Boothは少しばかりにしろ、このRobinsonとは考えを異にすることが忘れられてはならないのである。

ここで一つ気になるのは、Claudianの言葉の中の“*Fortuna*”即ち“Fortune”が、人に悪さをしかける想像上の存在（運命の女神）の意なの

1) “Fate”は“...it seemed almost to balance all the Malice of his Fate.” (IV, v)のように、“Fortune”と同じ特性を持たされている。また、Dr. Harrisonの言葉ではあるけれど、“...A superstitious Heathen would have dreaded the Malice of *Nemesis* in your Situation...” (III, x)とあるように、復讐の女神も同じ特性を持たされている。“Fortune”も“Fate”も、“Nemesis”も、迷信的な存在として同列に扱われている訳である。

2) *Amelia*, ed. Battestin, p. 29, n. 2.

か、それともただの偶然の意なのかということである。どちらでも結局は同じことになるにせよ、“Fortune”に神性を認める方は、迷信的であるが故に、精神の発達段階で言えば、まだ十分哲学の段階にも入っていない所が違ふ。

そして、Epicurean達がその支配を信じた“Fortune”とは、Loeb版の訳にもあるように、chanceに他ならない。そして、Fielding自身もそのように解釈していたと思われる彼の一文が、*The Champion*(22 January 1740)の中にある。<sup>1)</sup>少々長くなるけれど、後でふれる魂の不滅とか来世の問題にも関係するので、敢えて引用することにする。

And supposing that the deist, nay, the atheist, could carry his point, supposing that the belief of a future state, nay, of a very Deity, could be rooted out of the world, and men could be brought to believe that this vast regular frame of the universe, and all the artful and cunning machines therein were the effects of chance, of an irregular dance of atoms. Suppose the atheist could establish his creed . . . nay, suppose the deist could establish his, that we could believe the Deity a lazy, unactive being, regardless of the affairs of this world, that the soul of man, when his body dieth, lives no more, but returns to common matter with that of the brute creation, where would be the advantage accruing to us? (*Works*, ed. Henley, XV, 164)

この宇宙は、偶然、即ち“atoms”の不規則な踊りの結果だとする理神論者、または無神論者の教義とは、Epicureanism以外の何ものでもない。

ところで、Epicureanの宿命論(必然論)とは、言わば偶然が必然になると主張するものだから、普通に考えると妙な感じもするが、要するに宿

---

1) これは、山本利治「*Amelia: A True History in Humble Prose*」,*The Albion*, 9号 32頁にも引用されている。

命論とは、自然の因果関係には目を向けず、それゆえ人間の意志とか行い（即ち art）を無視し、物事の結果にだけ目を奪われるのを本質とするとして了解しておけば良いだろう。

“Fortune” の意味を一応二つに区分すると、Booth はもとより、Robinson さえも、迷信的な意味での “Fortune” などは信じていないことになる。それでは、ただの “Chance” についてはどうかと言うと、Booth は諸々の事柄が全て偶然によって左右されているとまでは思っていないと判断すべきである。そのような外的運命を信ずるのは Robinson に他ならない。しかし、Booth がどんな意味の “Fortune” の支配も信じていないかと言うと、そうも言えないのである。

Claudian の一節にもある “atoms” のイメージに注目しよう。宇宙空間を漂い、“design”（神の “Art” 即ち “Providence”）ではなく、“chance” によって支配されるという “atoms” は、小宇宙たる人間の内部で、その “design”（人の “Art” 即ち “Prudence”）によって制御されず、たまたまどれかが優勢になると Booth が考える “Passion” によく似ている。そして Booth もそういう意味での偶然の支配を信じている訳であって、ここが、Booth と Robinson の考えがほとんど変わらないという所以である。だが、Booth の必然論は、人間の外なる偶然によって諸々の出来事が引き起こされるという Robinson のものとは違い、内なる偶然によって人間の行動が決定されると考えるものということになる。だから “Booth” は、自分では “Fortune” を信じてはいないつもりでも、結局彼は上に述べたような意味での “Chance” の支配を信じているから、彼もやはり “Fortune” の信奉者に違いないのである。

作者の考えに従えば、古来、偶然の支配を信じ、それ故に徳行を軽視するゆゆしき傾向が跡を断たない。そして今それは、“Fortune” のかわりに “Passion” の支配を前面に押し出し、ある意味で迷信を避けて科学性を装いながら、もし人間が “Passion” に動かされているに過ぎないならば、徳などは存在しないも同然だと説くのである。そして、このような思想に染



まっているのが他ならぬ Booth なのである。

人間の行動を感情が支配するという考えで、当時として有名だったのは先ず Hobbes だったという。Booth の考え方には、Hobbes と極めて似た所もあるが Booth 自身の Hobbes 批判にも見られるように、Hobbes が自己愛しか認めないのに対し、Booth は他者への愛も人間の本性として認める点が明確に異なる。自己愛は“Providence”の否定につながるとも考えられたが、<sup>1)</sup> この自己愛を根本原理とした思想家として作者が名をあげるのは、Hobbes の他に Mandeville や Rochefoucauld である。<sup>2)</sup> Hume の名前は一度も *Amelia* に出てこないけれども、Battestin によると、Booth の考えは Hume の思想を色濃く反映しているようである。<sup>3)</sup>

Dr. Harrison や *Amelia* が、宗教とか教育における“Hope”や“Fear”の有用性を説くのは、Locke の観念連合の考え方の影響であって、決して感情の全面的支配を認めている訳ではないと言われる。

作品の中で数度“Head”と“Heart”が対置された表現に出会うが、<sup>4)</sup> これらに見られるように、作者はあくまでもこれら両者のバランスを重んじる姿勢を変えていない。彼の思想は一般に Christian stoicism と呼ばれるもので、それは、キリスト教が、信仰の面はもとより感情的な面でも Stoicism の欠陥を補っているものと考えられる。それは当時の Latitudinarian の思想でもあり、作者自身は“Christian Philosophy”と呼ぶものである。

この世のいかなる出来ごととも、決して運命の女神の仕業でもなければ、ただの偶然の結果でもない知りつつも、やはり多くの人には、まるでそのように見えるという事実は否定し難い。そして、そのような印象を表わ

1) See *Amelia*, ed. Battestin, p. 31, n. 2.

2) *Ibid.*, p. 114, p. 21.

3) See M. C. Battestin, “The Problem of *Amelia*: Hume, Barrow, and the Conversion of Captain Booth,” *ELH*, XLI (1974), 613-48.

4) E. g., “. . . I do assure you of this young Man, that he hath not only a good Heart, but a good Head too. . . .” (XI, ii).

す比喩として、“Fortune”は厳然とその命脈を保っている。実際 *Amelia* でもこの語は、“Fortune”の支配など信じるはずもない敬虔な信仰者 *Amelia* や、更には神学者 Harrison によっても平気で用いられる。だから、この語を使うかどうかで、“Fortune”の存在を信じているかどうかの判断を下すことはできない。

*Amelia* におけるこの語の使用の最も厄介なのは、語り手による場合である。“Fortune”の支配を明らかに否定する語り手が、頻繁に“Fortune”という語を使うために、“Fortune”が実際は他のもの、そして特に問題になるのは、“Providence”を指す可能性が生じてくることである。

Dr. Harrison は、*Amelia* に遺産が戻った時に、“... Your Sufferings are all at an End; and Providence hath done you the Justice at last, which it will one Day or other render to all Men . . . .” (XII, vii) と言うが、これが Booth 達の後日談における語り手の“As to *Booth* and *Amelia*, Fortune seems to have made them large Amends for the Tricks she played them in their Youth.” (XII, ix) という表現と響き合って、ここの“Fortune”はその一部として“Providence”を意味するようになる。<sup>1)</sup>

ところで D. S. Thomas は *Amelia* だけではなく *TJ* における“Fortune”にも言及している。彼はそこで、*Amelia* の場合と同様、*TJ* でも語り手

1) W. A. Speck は、Fielding が“Fortune”と“Providence”を同じような意味で用いている例として、*JA* から次の箇所をあげている (*Society and Literature in England 1700-60* [Gill & Macmillan, 1983], p. 101)。

... ‘Sir,’ says *Adams*, ‘Fortune hath I think paid you all her Debts in this sweet Retirement.’ Sir, replied the Gentleman, I am thankful to the great Author of all Things for the Blessings I here enjoy. . . . (III, iii).

これは明らかに、本論で *Amelia* から引用した一節とよく似ている。

“Fortune”が結局“Providence”になる問題について、Allan Wendt は、“Fortune in *Amelia* is not the goddess chance but the direct operative factor of God’s will on earth.” (“The Naked Virtue of *Amelia*,” *ELH*, XXVII [1960], 136) という解釈法を示す。

と主人公の“Fortune”の見方が対立的であるが、*TJ*では *Amelia* と逆で、語り手が“Fortune”を信ずるのに対し、Tomは信じないという重大な発言をする。<sup>1)</sup> Joseph — Tom — Booth という系譜と、それぞれの作品の語り手の近似性を考えると、このような大きな変化は余りにも意外である。そこで D. S. Thomas が論拠とする *TJ* 中の二箇所をまず引用しておく。

(1) Notwithstanding the Sentiment of the *Roman* Satyrist, which denies the Divinity of Fortune; and the Opinion of *Seneca* to the same Purpose: *Cicero*, who was, I believe, a wiser Man than any of them, expressly holds the contrary; and certain it is there are some Incidents in Life so very strange and unaccountable, that it seems to require more than human Skill and Foresight in producing them. (XIV, viii)

(2) ‘Sure,’ cries *Jones*, ‘Fortune will never have done with me, till she hath driven me to Distraction. But why do I blame Fortune? I am myself the Cause of all my Misery. All the dreadful Mischiefs which have befallen me, are the Consequences only of my own Folly and Vice. . . .’ (XVIII, ii)

引用(1)で注目すべきは“the Divinity of Fortune”という一句である。<sup>2)</sup> このように“Fortune”に神性を認めるのは、前にも述べたように、迷信的な運命の女神の存在を認める立場である。すると Seneca 等の哲学は、そのような存在を否定する段階に達しているということである。そして引用(2)は、Tomも少なくともその段階に達していることを示すという風に読める。では語り手はどうだろうか。引用(1)で、彼が Seneca 以

1) Thomas, *op. cit.*, p. 179.

2) Cf. “A surprising Run of Luck in a Gamester is often mistaken for somewhat else, by Persons who are not over zealous Believers in the Divinity of Fortune.” (I, v).

上に Cicero を評価するのは、Cicero が迷信的な存在とか、ただの偶然の力を信ずる段階を越えて、何か不思議な力、即ち“Providence”に近いものを察知するに至っているからではないかと思われる。<sup>1)</sup> そして Seneca に関する場合と違って、Cicero に関しては、語り手は“Fortune”によって実際は“Providence”を表わしていると考えられる。<sup>2)</sup> だから *TJ* の語り手も、それに主人公も、“Fortune”の力を信じているとは言えず、それは *Amelia* の場合と本質的にはあまり変わらないということになる。

Fielding は Homer の作品中の Axylus を博愛主義者の典型と見なしており、*Amelia* の中で Dr. Harrison にこの異教徒 Axylus を、その精神においてキリスト教徒だと断言させるが、<sup>3)</sup> これは良きサマリア人の評価とも似通っている。そしてそれと同じように、哲学者 Cicero も異教の段階を越えて、“Christian Philosopher”に近づこうとしていると評価されると考えられる。

“Providence”の問題は、魂の不滅とか、来世の問題とからんでいるが、この点でも Cicero はほぼ同じような評価を受けている。

Dr. Harrison が Booth に宛てた手紙を、Booth が Miss Mathews に読んで聞かす所があるが、その一節は次のようになっている。

“... If the Heathen Cicero, doubting of Immortality (for so wise a Man must have doubted of that which had such slender Arguments to support it) could assert it as the Office of Wisdom ... With how much greater Confidence may a good Christian despise and even deride all temporary and short transitory

1) Battestin は、Tom も“Providence”を意識していると指摘する。  
See M. C. Battestin, *The Providence of Wit*, p. 156.

2) Battestin も、この“Fortune”は“Providence”を指すと理解している (*ibid.*, pp. 155-57)。なお、この問題については、同様の趣旨で、拙論「人間をしてキリスト教徒」『下関商経論集』第21巻第2号 1-20頁でもふれたことがある。

3) *Amelia*, IX, viii.

Evils! . . . ” (III, x)

これによれば、Ciceroは魂の不滅を疑っていることになる。しかし疑いであって、明確な否定ではない。それがもっとはっきりするのが、キリスト教に改宗した *TJ* 中の哲学者 Square の ‘. . . *Cicero* himself seems rather to profess an Inclination to believe, than any actual Belief in the Doctrines of Immortality. . . .’ (XVIII, iv) という言葉においてである。Ciceroは、魂の不滅を信じたい気はあるが、完全な belief には至らない。だから、疑っていることにはなるが、しかし、はっきりとした否定ではない。Battestinによると、<sup>1)</sup> Ciceroは future state を信ずる意向もあったが、それはただ probable なものとしてであって、certain なものとしてではなかったという。Ciceroはいい所までは行っているが、啓示による確信にまでは至らない。<sup>2)</sup> これは Booth の状態に非常に良く似ている。そして、それこそ Claudian のように、何か現実の壁にぶつかれば大きくぐらつきかねない状態である。しかし、Booth はつまづいても倒れもせず、ついにはその揺れから、Dr. Barrow の説教集を読んだことでキリスト教に改宗することによって立ち直ったのである。

後はいくつか関連したことについてふれ、論の結びとしたい。作者は “Providence” の存在を信ずることの重要性を説くけれど、ひたすら神を信じ、その力にすがればよいとは決して言わない。或る methodist の描写にもあるように、ただの “Faith” のみで “Work” を無視する者は、また別種の必然論に陥るからである。

“Work” が大切であるが故に “Merit” も大きな問題になるが、しかし “Providence” があるとは言え、“Merit” の報いは必ずしもこの世においてある訳ではない。現世に限って見ると、悪が栄え、善は報われぬことも

1) *Amelia*, ed. Battestin, p. 137, n. 3.

2) これに関連し、Battestinは、“The contrast between divine assurances of immortality and the uncertain hopes of the heathen philosophers was a commonplace of the Christian ‘consolatio.’” (*ibid.*, p.138, n. 1) と言う。

珍らしくない。どうしてそうなるか分らぬが故に、ある人達はそれを“Fortune”のせいにする。Fieldingが人生のこうした現象面に目を向け、人生をhazardに喩えたのも、<sup>1)</sup> 人生の真実の一面を語っているなら、彼が*Amelia*では反対にチェスに喩えたのも、<sup>2)</sup> また別の真実の一面を語っていると言える。人生は“Fortune”によってではなく、“Art”によるとは言え、自己の利益のために“Art”を駆使し、人を利用したり、陥れたりする悪意に満ちた輩が世の中には数多くいて、疑うことを知らぬ善良な人間はやすやすとその罠にはまる。それ故、人間は善良であるばかりでなく、“Prudence”も備えなければならないということになるが、しかし“Prudence”が足りないからといって、犠牲者を一概に責める訳にはいかない。こういう人達は確かに不運である。そして、そういう意味では“Fortune”の実在感を否定し切れない。<sup>3)</sup>

しかし、たとえこの種の“Art”の好餌になろうとも、自らはこの種の“Art”は絶対に揮わないことが“Innocence”であると考えられている。既に姦淫の罪を犯したBoothも、妻をある種のことを利用してようTrentにそそのかされたときっぱりと、“I know my Condition is very hard . . . but I have one Comfort in it, which I will never part with, and that is Innocence. . . .” (X, vii) と答える。正に不運としか言いようのない事態に立ち至っても、“Innocence”が最後の心の支えになる。これに関

1) “. . . I imagine wisdom to be of very little consequence in the affairs of this world: human life appears to me to resemble the game of hazard, much more than that of chess. . . .” (*The Champion*, 6 December 1739; *Works*, XV, 88).

この表現に関し、Battestinは作者のWalpoleに対する皮肉を考慮し、まともには受け取らない(*Amelia*, ed. Battestin, p. 16, n. 1)。

2) *Amelia*, I, i.

3) C. J. Rawsonは、Fieldingの前述の二つの人生の喩えに関し、そこには単なる逆説以上のものがあると言い、邪悪な世界における“unpredictability”に、運命の女神とか偶然とは別の意味での“Fortune”らしきものを認める。See C. J. Rawson, *Henry Fielding and the Augustan Ideal under Stress* (Routledge & Kegan Paul, 1972), pp. 68ff.

連し語り手は次のように言う。

... scarce any Condition of Fortune can be [absolutely desperate]. Art and Industry, Chance and Friends have often relieved the most distress Circumstances ...

... tho' Fortune may make thee often unhappy, she can never make thee completely and irreparably miserable without thy own Consent. (VIII, iii)

このように、罪なき者はとことん絶望的になることはないし、不幸になっても、どうしようもない程みじめにはならない。現世の行いの結末は来世でつけられるから、Dr. Harrison の言葉を借用すれば、*“the old-Baily in the other World”* (X, ii) で潔白を堂々と主張できる生き方をしなければならぬことになる。そして、Booth という人間は、“Prudence” という意味での“Art” が足りなかったから人生に一度はつまづいたものの、それ以外の意味での“Art”，そして“Industry”，“Chance” (“Providence”)，それに“Friends”のお蔭で立ち直ったし、来世における裁きでも、結局無罪放免を言い渡されるに違いない人間として描かれている。